

# お伽つれぐ

——徒然草より——

登 志 衛

## 猫 又

昔々山奥に猫又といふお化がゐりました。山奥へ人が来る  
ミ猫又が飛び附いて食つてしまひました。その猫又が町の  
中へも出るやうになりました。誰もまだ猫又といふ化物を  
見た者はありませんでしたが、猫又といふお化は何でも大  
きなく、化猫で、尻尾が二つに分れてゐるといふ話でした。  
町の人々は猫又を怖がつて、夜は誰も一人では外へ出ませ  
んでした。それだのに坊さんが一人真暗な夜道を歩いて來  
ました。およばれに行つて、お土産なご貰つて、歸つて來  
る途中で日が暮れてしまつたのです。  
「あゝ怖い、怖い」。と思ひながら、やつと自分の家の近  
所の橋の上まで來ました。するに、いきなり猫又が飛附い  
て食附かうございました。坊さんは魂消て、

「助けて呉れ、猫又だ、猫又だ」。  
ミ大聲を出して叫びました。町の人々は、  
「そら猫又が出た、退治しよう」。

ミ刀を提げ、松明をこもして、ぞろぞろ出て來ました。  
橋の上に来て、暗い川の中をのぞくに、坊さんが川の中へ  
落つこつてゐて、土産物も水に漬かつてしまつてづぶ濡に  
なつてゐます。大急ぎで坊さんを川から引上げて、

「猫又は何處へ行つた、猫又出て來い、切つてやるぞ」。  
ミ町の人々は松明のあかりで、その邊を捜しましたが、猫  
又は何處にも居りませんでした。そして坊さんのうちの犬  
が濡鼠の坊さんにちやれて尻尾を振つて居りました。坊さ  
んが猫又たと思つて吃驚仰天したのは、此のうちの犬だつ  
たのです。

猫又といふお化は本當は何處にも居なかつたのです。

## 土大根

昔々西の方の國に一人の殿様がありました。此の殿様は子供の時分から大根がお好きで、毎朝々々大根を焼いて二本づつ、二本づつ召上りました。

或時、家來達が一人残らずお使ひに行つてしまつて、お城の中には殿様がたつた一人で留守番をしてお出でになりました。そこへ遽かに大勢の敵が押寄せて、お城の門を破つて攻入りました。殿様が、「あつ」を驚いていらつしやるに、お城の奥の方から、一度も見たこゝのない強さうな武士が二人出て来て、大聲をあけて、

「やあ、敵の者ども、千人でも萬人でも一度にかゝつて来い。みんな首をすつ飛ばしてやらう」。

と云ひました。

「なんだ、へなちよこ武士が、生意氣言ふなつ」。

と敵の大軍は一度に二人の武士へかゝつて行きました。二人の武士は車の輪が廻るやうに、兩手に持った刀をぐるぐる廻して敵の大軍を戦ひました。

二人の武士があまり強いので、敵軍は、

「これはかなはぬ、逃けろ〜」。

と一人残らず逃けて行つてしまひました。殿様は二人の武士の勇しい動きを褒めて、

「あつばれ、〜。大勝利々々々」。

とお褒めになりました。二人の武士は、

「私どもは殿様の毎朝召上つて下さいます大根で御座います。お禮に今日は殿様をおたすけ申上げに來ました」。

と云つて、ふつと消えてしまひました。

## 榎の僧正

昔々或處にお寺がありました。そのお寺の坊さんは大變なおこりん坊で、すぐに腹を立てるのが癖でした。此のお寺の庭に大きな榎が一本あつたので、人々が此の坊さんの事を、

「榎の僧正様」。

と呼びました。するに坊さんはすぐ腹を立て、

「何だ、人のこゝを榎の僧正様だ、そんな事を言ふなら榎

を切つてしまふぞ」。

と言つて、鋸を持つて來て庭の榎を切つて焚いてしまひました。榎を切つてしまつた後には切株が残りました、人々は早速此の坊さんの事を、

「切株の僧正様」。

と呼ばれました。するに坊さんは又腹を立て、

「ちやつ、切株の僧正様だ、そんな事を言ふなら切株を掘つてしまふぞ」。

と言つて、鍬を持つて來て、切株を掘つて捨て、しまひました。切株を掘つた跡に穴が出來て、其の穴へ、雨水が溜つて池になりました。人々は今度は、此の坊さんの事を、

「掘池の僧正様」。

と呼ばれました。するに坊さんは又々腹を立て、

「えい腹が立つ、埋めてやれ」。

と言つて、土を運んで來て、その池を埋めてしまひました。そしたら人々は、此の坊さんの事を

「埋池の僧正様」。

と呼ばれました。

## 東京女子高等師範學校 保育實習科生徒募集

右は今月二十日頃の官報にて募集される。詳細は同官報並びに、東京女子高等師範學校教務課に付き照會されたし。(學校宛の問合せは貳錢切手封入のこご)

出願期限は、一月二十日より三月十日までとのこと。